

大伴家持歌の聴覚表現と漢詩文

著者	曹 元春
雑誌名	文學藝術
巻	43
ページ	9-26
発行年	2019-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1087/00003375/



大伴家持歌の聴覚表現と漢詩文

曹 元 春

はじめに

大伴家持の歌には、視覚より聴覚に頼ったものが比較的によく見られると指摘されてきた。その聴覚表現を素材別に分類すると、自然の音と生活の音とに分かれる。自然の音は豊富で、鳥、鹿、蝉、蠅、雷、風、波、竹及び水の音などが詠まれている。一方、生活の音には琴、楫、鈴の音があつて、その他に人間に関わるもの、即ち船人の歌、子供泣き声なども含まれている。

本稿は大伴家持歌の聴覚表現と漢詩文との繋がりを考察してみたい。紙幅の関係で、家持の鶯・ホトトギスの鳴き声と『詩経』より初唐までの漢詩文との関連を検討することにする。

一 鶯

鶯は春の鳥の代表で、その異名は多く、『説文解字』によれば、次の通りである。

鶯、鳥也。即黃鸝。一名倉庚、一名商倉、一名鶯黃、一名鸝鷯、一名鸝鷯、一名鸝鷯、一名楚雀、一名黃袍、一名搏黍、一名黃鳥、一名金衣公子。(鶯は鳥で、即ち黄鸝である。その別名は倉庚、商倉、鶯黃、鸝鷯、鸝鷯、鸝鷯、楚雀、黄袍、

搏黍、黄鳥、金衣公子である。）

鶯は透き通って美しい鳴き声をするために、漢詩文においては、鶯の鳴き声の表現は極めて豊富である。『詩経』より初唐まででは、鶯の鳴き声は「啼」「鳴」「弄」「喧」「響」「交」「轉」「歌」「哢」「喚」「流」「語」「聲」などと表現されている。その他に「黄鳥」「倉庚」の鳴き声が「咬咬」「啾啾」のような擬声語でも表現されている。

『万葉集』を作った大伴家持大事典^①によれば、鶯は『万葉集』では五十二首に詠まれているが、家持の歌では十二首に詠まれ、題詞を含めると鶯は十四回詠まれており、ホトトギス（六十三首）の次に多く、鶯の鳴き声が各首で豊かに表現されているという。

鶯の鳴き声の表現では、「鳴く」が一番多く、八例も用いられている。その次は「声」で、四例ある。「哢」は二例、「轉」と「啼」は一例ずつ用いられている。

先ず、「鶯が鳴く」という表現が用いられた家持の歌を見てみよう。

（一） 鶯が鳴く

- ① うち霧らし雪は降りつつしかすがに我家の園にうぐひす鳴くも（2・一四四一）
- ② うぐひすの鳴き散らすらむ春の花いつしか君と手折りかざさむ（17・三九六六）
- ③ うぐひすは今鳴かむと片待てば霞たなびき月は経につつ（17・四〇三〇）
- ④ み園生の竹の林にうぐひすはしば鳴きにしを雪は降りつつ（19・四二八六）
- ⑤ うぐひすの鳴きし垣内にはへりし梅この雪にうつろふらむか（19・四二八七）
- ⑥ 春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影にうぐひす鳴くも（19・四二九〇）
- ⑦ あらたまの年行き反り春立たばまづ我がやどにうぐひすは鳴け（20・四四九〇）

⑧うちなびく春とも著くうぐひすは植木の木間を鳴き渡らなむ（20・四四九五）

家持の早期作品ではその原文に表意文字が多用されている。表意文字の原文を元にして、漢詩文との関連を考察するのが比較的に便利であるが、残念なことに、以上の八首のうち、一四四一歌の原文だけに、表意文字が使用されている。一四四一歌は天平五年（七三三）の作品で、当時、家持は十六歳であった。歌作りの学習、模索の段階であったが、雪が降り続いて、霧に包まれた朧な景色と自宅の庭で囀っている鶯を詠んだこの歌は、早春の情景をよく表している。この歌の原文は次の通りである。

大伴宿祢家持鶯歌一首

打霧之 雪者零乍 然為我二 吾宅乃苑尔 鶯鳴裳

題詞にある「鶯歌」は鶯の歌という意味で、漢詩に「聽鶯歌」（唐の靈澈）という詩題がある。「鶯歌」の漢詩の用例は次の通りである。

①持底喚歡來 底なを持て歡もつを喚よび來たる

花笑鶯歌詠 花笑ひて 鶯歌詠す

（隋・無名氏「西鳥夜飛（五曲）」其四）

②繁鶯歌似曲 繁鶯歌ひて曲に似たり

疎蝶舞成行 疎蝶 舞ひて行を成す

（初唐・王勃「對酒春園作」）

歌の原文にある「零」は『康熙字典』によれば、「落也（落ちる）」という意味である。細雨が降る様子などを多く「零」で表現する。また、雪が降り落ちる様態を描く時、「零」と類似する「飄零」がよく用いられる。例えば、陶淵明の「答龐參軍」詩に、

昔我こ云別 昔我こ云に別るるに

倉庚載鳴 倉庚載はめて鳴く

今也遇之 今之に遇へば

霰雪飄零 霰雪飄零す

とある。陶淵明の「倉庚載鳴」「霰雪飄零」は、親友の龐參軍との離別・再会の季節を表現している。家持は「雪が降り続いて、鶯が鳴いている」の歌を構想する時、陶淵明のこの詩からヒントを得たのかもしれない。

「打霧之雪者零乍」の続きの「然為我二」は、漢文として読めば、「けれどもわたしのために」という意味である。この歌は、空全体が霧に包まれて、雪はひらひらと降り続いていくけれども、鶯は私のために、我が家の庭で囀っているという意なのである。

「霧」「雪」「吾宅」「苑（園）」「鶯鳴」を手がかりにして、漢詩との関連を調べてみた所、この歌は、陶淵明の詩だけではなく、『玉台新詠』巻九に収められる南朝梁の沈約の「八咏詩」其二「會圃臨春風」も踏まえたのではないかとも思われる。

臨春風 春風に臨めば

春風起春樹 春風春樹に起る

遊絲暖如網 遊絲暖として網の如く

落花雰似霧 落花雰として霧に似たり

……

舞春雪 春雪を舞はし

雜流鶯 流鶯を雜はらしむ

……

想芳園兮可以遊 芳園の以て遊ぶ可きを想ひ

念蘭翹兮漸堪摘 蘭翹の漸く摘むに堪へたるを念ふ

……

本詩の冒頭の部分では、「風に吹かれて沢山飛ぶ蜘蛛の糸はまるで織り成した網のようで、散る花はこまかく飛んで霧のようだ」と詠んでおり、家持の歌に描かれた「うち霧らし」の景色と似通っている。また、沈約の「舞春雪、雜流鶯」と「想芳園兮可以遊」を参考にして、「雪は降りつつしかすがに我家の園にうぐひす鳴くも」の部分を構想したのではないかと考えられる。因みに沈約の「流鶯」の「流」は、鶯の美しい鳴き声を表現したものである。次に「鶯が鳴く」の用例を見てみよう。

① 屬耳聽鶯鳴 耳を屬して鶯の鳴くを聴き

流目翫鯈魚 目を流して鯈魚を翫ぶ

西晉・張華「答何劭二首」其一（『文選』卷二十四）

② 閣影臨飛蓋 閣影飛蓋に臨み

鶯鳴入洞簫 鶯鳴きて洞簫に入る

南朝梁・庾肩吾「從皇太子出玄圃應令詩」（『藝文類聚』卷六十五）

三九七六歌の前文にある「非此眺翫…、終日目流」は、張華の「流目翫鯈魚」を踏まえていると指摘されており、その対句となっている「屬耳聽鶯鳴」も家持は当然知っていたはずである。

(二) 鶯が囀る

家持の歌に一例しかない「鶯が囀る」は、次のように三九六五歌の前文に見られる。

……方今、春朝に春花は、馥ひを春苑に流し、春暮に春鶯は、声を春林に囀る。

漢詩には「鶯が囀る」が多く用いられて、その用例は次の通りである。

①鶯鳴一兩囀 鶯鳴 一兩囀り

花樹數重開 花樹 數重開く

南朝梁・宗懷「早春詩」(『初學記』卷三所収)

②新鶯隱葉囀 新鶯 葉に隠れて囀り

新燕向窗飛 新燕 窗に向ひて飛ぶ

南朝梁・蕭繹「和劉上黃春日詩」(『玉台新詠』卷七所収)

③朝日斜來照戸 朝日 斜めに來たりて戸を照らし

春鳥爭飛出林 春鳥 爭ひ飛びて林を出づ

片光片影皆麗 片光 片影皆な麗しく

一聲一囀煎心 一聲一囀 心を煎る

南朝梁・蕭綱「倡樓怨節」(『玉台新詠』卷九所収)

「囀」は、高く低く、美しくさえずる鳥の鳴き声を形容する。家持の「春鶯囀声」は右の三首の漢詩の表現を参考にしたのではないかと思われる。

(三) 鶯が啾く

家持の鶯の歌の題詞では「鶯が啾く」が二例用いられている。

鶯の晚く啾くを怨みて歌一首

うぐひすは今^{おそ}は鳴かむと片待^なてば霞^{かたま}たなびき月^{かすみ}は経^へにつつ (19・四〇三〇)

即^{すなは}ち鶯の啾^なくを聞きて作りし歌一首

うぐひすの声は過ぎぬと思へども染みにし心なほ恋ひにけり (20・四四四五)

四〇三〇歌は、鶯の美しい鳴き声を楽しみに待っているのに、時期が過ぎてもなかなか鳴かないという、詩人の不

満の思いを「晩」と「怨」で表している。

四四四五歌は、その題詞によれば即興の歌のようである。この時期なら鶯はもう鳴かないと思ったが、思いもかけずその鳴き声が聞こえて、即座に歌を詠んだのである。歌の題詞も歌も、詩人の驚きや喜びの心情をよく表している。家持の「咲く」は単なる鳥の鳴き声を表した言葉ではなく、好きな鳥の鳴き声を描写する時の専用の言葉だということが明らかである。次に漢詩における「鳥が咲く」の用例を見てみよう。

①鳥咲歡新節 鳥咲 新節を歡び

冷風送餘善 冷風 餘善を送る

東晉・陶淵明「癸卯歲始春懷古田舍二首」其一

②咲鶯猶響殿 咲鶯 猶ほ殿に響き

横絲正網天 横絲 正に天を網す

隋末唐初・李世民「初夏」

漢詩においては、「咲」は、鳥の美しい声を描写する詩語であって、次の蕭綱の「和林下妓應令」詩によってもよく分かる。

簾聲如鳥咲 簾聲鳥咲の如し

舞袂寫風枝 舞袂風枝を寫す

南朝梁・蕭綱「和林下妓應令」詩（『玉台新詠』卷七）

「簾」は笛の一種であって、「簾聲如鳥咲」とは、「美しい簾の音色は鳥の囀っているようである」という意である。家持の歌の題詞に用いられる「咲」の使い方も漢詩と同じであり、「咲」によって、鶯の鳴き声をこよなく愛した家持の心境が窺い知れるのである。

(四) 鶯が啼く

家持の歌には「鶯が啼く」という用例はないが、「鶻鶻が啼く」の用例は一例ある。これは「春愁絶唱三首」と称

賛されている歌（四二九〇～四二九二）の左注に用いられている。

春日遅々として鶺鴒正に啼く。悽惻の意、歌に非れば撥ひ難きのみ。仍ち、この歌を作り、式て締緒を展べき……。

「春日遅々として、鶺鴒正に啼く」は『詩経』幽風・「七月」に基づく表現であると指摘されている。漢詩には「倉庚鳴」「倉庚啅聲」「倉庚啅啅」などの表現があるが、「倉庚啼」の用例はない。代わりに、多く見られる「鶯啼」の用例を見てみよう。

①鶯啼春欲駛 鶯啼きて 春駛^はせんと欲す

無爲空掩扉 爲すこと無くして 空しく扉を掩ふ

南朝梁・蕭綱「聖製十六首」其四（『玉台新詠』卷九）

②鶯啼歌扇後 鶯は啼く 歌扇の後

花落舞衫前 花は落つ 舞衫の前 南朝陳・陰鏗「侯司空宅詠妓詩」（『藝文類聚』卷四十二）

このように家持は、漢詩の「鶯啼」を元にして「倉庚啼」に言い換えたと考えられる。

(五) 鶯の声

家持は「鶯の声」の歌を三首詠んでいる。また、(二)で挙げたように「春鶯は声を春林に囀る」という表現もある。

①……春花の 咲ける盛りに 思ふどち 手折りかざさず 春の野の 繁み飛び潜く 鶯の声だに聞かず……
（17・三九六九）

②山吹の繁み飛び潜くうぐひすの声を聞くらむ君はともしも（17・三九七一）

③鶯の声は過ぎぬと思へどもしみにし心なほ恋ひにけり（20・四四四五）

④方今、春朝に春花は、馥ひを春苑に流し、春暮に春鶯は、声を春林に囀る。(17・三九六五の前文)
漢詩の「鶯聲」の用例は唐代以前には極めて少なく、蕭愨の「春日曲水詩」に一例あるのみである。

二月鶯聲纔欲斷 二月鶯聲纔わづかに斷えんと欲す

三月春風已復流 三月春風已に復た流る

南朝梁・蕭愨「春日曲水詩」(『初學記』卷三)

漢詩には「鶯聲」の用例は少ないが、「黃鳥聲」の用例は比較的に多い。

①復聞黃鳥聲 復た聞く黃鳥の聲

全作相思曲 全て相思の曲と作る

南朝梁・王僧孺「春思詩」(『玉台新詠』卷十)

②絳樹揺風柔 絳樹風に揺れて柔かに

黃鳥弄聲急 黃鳥聲を弄すること急なり

南朝梁・費昶「長門怨」(『藝文類聚』卷三十二)

「鶯の声」の他に、家持は「春鳥の声吟ひ」も詠んでいる。その「防人の悲別の情を陳べし歌一首 短歌を并せたり」に

……若草の妻も子どもをちこちに さはにかく囲み居あ春鳥うばの声吟ひ……(20・四四〇七)

とある。漢詩の「黃鳥聲正悲」と「黃鳥弄聲急」は詩人の心象風景を描いているが、家持の「春鳥の声」も同じ用法である。次に漢詩の「春鳥聲」と「春鳥吟」の用例を見てみよう。

①風吹桃李氣 風は吹く 桃李の氣

過傳春鳥聲 過傳す春鳥の聲

南朝梁・劉令嫺「聞百舌詩」(『藝文類聚』卷九十二)

「春鳥聲」と比べると「春鳥吟」は用例が少なく、次の曹攄の「贈石崇詩」に一例あるのみである。

②泄泄群瞿飛 泄泄として群瞿飛び

咬咬春鳥吟 咬咬として春鳥吟ず

魏晉・曹攄「贈石崇詩」(『藝文類聚』卷三十二)

「咬咬」は鳥の鳴き声を表す擬声語である。「咬咬」「啾啾」のような擬声語を除き、漢詩における鶯の鳴き声の表

現はその殆どが家持の歌に見られる。その処女作の一四四一歌をはじめとして、家持は積極的に漢詩の鶯の鳴き声の表現を取り入れたのである。

二 ホトトギス

ホトトギスは、中国では多く「杜鵑」と呼ばれる。『漢語大詞典』⁽²⁾では、

杜鵑、鳥名。又名杜宇、子規。相传为古蜀王杜宇之魂所化。春末夏初，常昼夜啼鳴，其声哀切。

(ホトトギスは鳥の名前、また杜宇、子規ともいう。古の蜀王、杜宇の魂が化したものと伝えられる。春の末から夏の初めに常に昼夜鳴き続け、その声は哀切である。)

と解説されている。『漢詩の事典』⁽³⁾に指摘されるように、中国の文学に杜鵑(子規)が頻繁に詠まれるようになるのは、盛唐期以後のことである。確かに唐代以前に杜鵑を詠む詩は少ない。また、「杜宇」、「子規」及び「郭公」の語を用いた詩は一首もなく、更に言えば唐代以前の杜鵑の鳴き声の表現には、「啼」、「鳴」と「哀苦」しかない。

① 杜鵑竹裏鳴

梅花落滿道 梅花落ちて道に満つ

魏晉・無名氏「子夜四時歌」春歌二十首 其六

② 杜鵑繞林啼

思從心下起 思いい心下より起る

魏晉・無名氏「孟珠(八曲)」其七

③ 中有一鳥名杜鵑

言是古時蜀帝魂 是れ古時の蜀帝の魂と言ふ

聲音哀苦鳴不息 聲音は哀苦して鳴き息まず

羽毛憔悴似人髡 羽毛は憔悴して人髡に似たり

南朝宋・鮑照「似行路難十八首」其七（『文選』補遺卷三十四）

鮑照の「聲音哀苦鳴不息」のように、蜀帝杜宇の典故を借用して心象風景を描くものは唐以前では僅かであるが、盛唐以後になると、杜鵑を詠む詩が増えて、その鳴き声の表現も豊かになった。特に「聲咽」「聲悲」「哭」「號呼」「哀哀叫」のように悲しい心情を描く表現がよく用いられるようになったのである。

盛唐以前の漢詩に比べると、日本では万葉歌人によって、ホトトギスが多く詠まれてきた。ホトトギスとその鳴き声について、『日本うたことば表現辞典』⁴では次のように説明されている。

ほととぎす（杜鵑・不如帰・時鳥・子規）はホトトギス科の鳥。日本でも繁殖するが、五月頃に中国、朝鮮から夏鳥として飛来し、山地の樹林に単独で生息する。……ホトトギスの鳴声は極めて特徴があり「テツペンカケタカ・ホツチヨンカケタカ」や「キヨツキヨ・キヨキヨキヨキヨ」などと聞こえ、昼夜わけへだてなく鳴く。また、『ちんちん千鳥のなく声』⁵でも、ホトトギスの鳴き声が詳しく紹介されている。

ホトトギスは、ウグイスのような透きとおる美声ではなく、鋭く響き渡る声で、オツキヨ、キヨキヨキヨキヨと鳴く。何か思いつめたような、胸に訴えかける一種独特の激しい声である。

万葉集中にホトトギスを詠んだ歌は全部で一五五首あり、そのうち、家持の歌は六十三首もあり、家持の鳥を詠む歌ではホトトギスが第一位である。そのホトトギスの鳴き声の表現も豊かで、それぞれ「喧く」「鳴く」「嚶く」「啼く」「初声」「夜聲」「夜鳴き」「音遙けし」などがあり、中でもよく用いられるのは「来鳴く」「喧く」「来鳴き響む」である。まず、「ホトトギスが喧く」の歌を見てみよう。

(一) ホトトギスが喧^なく

「喧」は『万葉集』の歌の題詞に十八回も用いられているが、「帥大伴卿宿三次田温泉」聞鶴喧「作歌一首」と久米

朝臣繼麻呂の「恨_二霍公鳥不_レ喧歌一首」を除き、他は皆、家持が用いたものである。千鳥の歌の題詞に三回、ホトギスの歌の題詞に十三回用いられている。ホトギスの歌の題詞は次の通りである。

- ① 大伴家持恨_二霍公鳥晚喧_二歌二首（8・一四八六、一四八七）
- ② 大伴家持雨日間_二霍公鳥喧_二歌一首（8・一四九一）
- ③ 立夏四月、既經_二累日_一、而由未_レ聞_二霍公鳥喧_一。因作恨歌二首（17・三九八三、三九八四）
- ④ 四月十六日夜裏、遙聞_二霍公鳥喧_一述_レ懷一首（17・三九八八）
- ⑤ 獨居_二幄裏_一遙聞_二霍公鳥喧_一作歌一首并_二短歌（18・四〇八九、四〇九二）
- ⑥ 聞_二霍公鳥喧_一作歌一首（18・四一九）
- ⑦ 廿四日応_二立夏四月節_一也。因_レ此廿三日之暮、忽思_二霍公鳥晚喧_一作歌二首（19・四一七一、四一七二）
- ⑧ 恨_二霍公鳥不_レ喧歌一首（19・四二〇三）

歌の題詞だけではなく、家持のホトギスの歌の原文にも「喧く」が全部で十二回用いられている。「喧く」はホトギスの鳴き声を表す家持の愛用歌語と言えよう。

漢語の「喧」は、声や物音などがやかましい、かしましい、かまびすしいという意味として用いられる。その最初の用例を見てみよう。

韓鼓喧_レ兮從夜達明 韓鼓喧しくして夜より明に達し

胡風浩浩兮暗塞營 胡風浩浩として塞營暗し

東漢・蔡琰「胡笳十八拍」（『詩紀』卷四）

「韓鼓」とは、古代の軍隊の使用する太鼓であって、その太鼓の大きく騒がしい音が「喧」で表されている。また、東晉の陶淵明の「飲酒二十首並序」其五に

結廬在人境 廬を結びて人境に在り

而無車馬喧かまびす 而も車馬の喧しき無し

とある。この「喧」は通行する馬と馬車の騒々しい音を表しており、蔡琰のそれと同じ用法である。鳥の鳴き声を「喧」によって描く漢詩の用例も少なくない。

①不観白日景 白日の景をかけ観みず

但聞寒鳥喧かまびす 但だ寒鳥の喧しきを聞くのみ

西晉・陸機「苦寒行」(『文選』卷二十八所収)

②喧鳥覆春洲 喧けんてう鳥春洲を覆ひ

雜英芳甸に満つ

南朝齊・謝朓「晚登三山還望京邑」(『文選』卷二十七所収)

③天桃晨暮發 天桃晨暮ひら發ひらき

春鶯旦夕喧かまびすし

南朝陳・謝莊「懷園引」(『藝文類聚』卷六十五所収)

①の冬の寒さに震える鳥、②の春の川の中洲に集まるたくさんの鳥、③の朝も夕方も絶えず鳴く鶯の、それぞれの鳴き声が「喧」で表現されている。大音量でやかましい鳥の鳴き声を描き出す場合に「喧」がよく用いられると言える。

「喧」の字は和訓では一般に「かまびすし」「やかまし」と読み、家持の歌では「喧なく」と読んでいるものの、漢詩での用法は日本の和訓の読みと同じである。家持はホトトギスの鋭く且つ響き渡る鳴き声を描き出すために漢詩の「喧」を取り入れたものと思われる。

(二) ホトトギスがな嚶なく

万葉集中には「ホトトギスが嚶く」は一例しかない。「内舍人大伴宿祢家持従三久迺京」報三送弟書持。「三首の歌の題詞に次のように用いられている。

橙橘初咲、霍鳥翻嚶。对^二此時候、詎不^レ暢^レ志。因作^二三首短歌、以散^二鬱結之緒^一耳

（橙橘初めて咲き、霍鳥翻^{かけ}嚶^なく。この時候に^{むか}対ひて、詎志を暢^のべざらめや。因りて三首の短歌を作り、以て鬱結^{こじつ}の緒を散らさまくのみ。）

漢文の原文によつて分かるように、四句と六字句を主体とするこの題詞は、第一句と第二句を視覚と聴覚の対句に仕立てたものであり、そこに家持の工夫が見られる。中国詩賦のような形式で題詞を書くのは家持による初めての試みであり、漢籍から学び取ったものを生かそうとする詩人の情熱が感じられる。

文中の「鬱結之緒」については、先学者によつていろいろと論じられているが、その一因は文芸上の友、風雅を共に楽しめる友人がいなかったことによるのではないかと思われる。歌作りに燃える二十四歳の家持は当時、後の越中時代の池主のような友を求めていたのであろう。その心境は「霍鳥翻嚶」によつて窺える。

家持の「霍鳥翻嚶」の「嚶」は、『詩経』小雅「伐木」の第二句「鳥鳴くこと嚶嚶たり」に基づくことが指摘されている。次にその詩を見てみよう。

伐木丁丁 木を伐ること丁丁たり

鳥鳴嚶嚶 鳥鳴くこと嚶嚶たり

出自幽谷 幽谷より出で

遷于喬木 喬木に遷る

嚶其鳴矣 嚶として其れ鳴くは

求其友聲 其の友を求むるの聲

（木を伐る音はこんこんと、鳥鳴く声はおうおうと。深き谷間より、高き木に移る。おうと鳴くその声は、友を呼ぶためである。）

この詩の第二句の「嚶」は鳥の鳴き声である。しかし、家持の「嚶」は単なる鳥の鳴き声を描いたのではなくて、むしろ「伐木」の第五句・六句の「嚶」として其れ鳴くは／其の友を求むるの聲」と同じく、仲間（友達）を求める心情の喩えとして用いられている。家持が弟書持の贈歌に報いる歌の題詞において、愛用する「喧」や「鳴」ではなく「嚶」でホトトギスの鳴き声を表したのは、そのような心情を伝えるためであろう。

(三) ホトトギスが来鳴き響む

家持のホトトギスの歌には「鳴きとよむ」が一例、「来鳴きとよむ」が六例ある。

- ① 卯の花もいまだ咲かねばほととぎす佐保の山辺に來鳴きとよもす（8・一四七七）
- ② 夏山の木末のしげにほととぎす鳴きとよむなる声の遥けさ（8・一四九四）
- ③ ほととぎす何の心そ橘の玉貫く月し來鳴きとよむる（17・三九一二）
- ④ 多祢の崎木の暗茂にほととぎす來鳴きとよめばはだ恋ひめやも（18・四〇五一）
- ⑤ 卯の花の咲く月立ちぬほととぎす來鳴きとよめよ含みたりとも（18・四〇六六）
- ⑥ ほととぎすいとねたけくは橘の花散る時に來鳴きとよむる（18・四一九二）
- ⑦ ほととぎす來鳴きとよめば草取らむ花橘をやどには植ゑずて（19・四一七二）

①と②は家持の早期の作品で、その原文は表意文字と表音文字によって記されたものである。この二首の歌の「とよむ」は表意文字の「響」で表記されている。

鳥の鳴き声と関連する漢詩の「響」の用例を見てみよう。

① 夜鳥響嚶嚶 夜鳥 響きて嚶嚶

朝光照煜煜 朝光 照らして煜煜

南朝梁・王僧孺「春怨詩」（『玉台新詠』卷六）

② 遷喬聲廻出 喬に遷りて聲廻出し

赴谷響幽深 谷に赴きて響き幽深なり

南朝梁・劉孝綽「詠百舌詩」(『藝文類聚』卷九十二)

③ 山鶯空曙響 山鶯曙響空しく

隴月自秋暉 隴月自ら秋暉

南朝梁・何遜「行經孫氏陵詩」(『藝文類聚』卷四十二)

以上の漢詩における「響」は、鳥の鳴き声があたりに広がり伝わるという意味である。杜鵑の鳴き声を「響」で表現した例は、盛唐の王維の「萬壑樹天に参し／千山杜鵑響く」(『送梓州李使君』)にも見られる。山や里近くで響き渡るように鳴くホトトギスの声の特徴をよく捉えた家持は、右の六朝時代の詩人の表現を踏まえ、ホトトギスの鳴き声を「来鳴り響む」で描き出したのではないかと思われるのである。

(四) ホトトギスが啼く

「ホトトギスが啼く」という表現は家持に一回だけ用いられた。それは次の歌の題詞に見られる。

更に霍公鳥の啼くことの晩きを怨みて歌三首

ほととぎす鳴き渡りぬと告ぐれども我聞き継がず花は過ぎつつ (19・四一九四)

我がここだ偲はく知らにほととぎすいづへの山を鳴きか越ゆらむ (19・四一九五)

月立ちし日より招きつつうち偲ひ侍てど来鳴かぬほととぎすかも (19・四一九六)

三首の歌の主題は同じで、ホトトギスの来ることを慕い待ち続けているのに、一向に來て鳴いてくれないので、不満がたまっている。その気持ちちが題詞の「怨」霍公鳥啼晚「三首」によってよく表されている。「霍公鳥が啼く」は「鶯が啼く」と同じように、鳥が美しく啼くという意味であるが、家持がどれほどホトトギスの鳴き声を愛したのかは、次のホトトギスの「初声」を詠んだ歌によっても分かる。

(五) ホトトギスの「初声」

ホトトギスの鳴き声を「初声」と表現した家持の歌の用例は次の通りである。

- ① 常人も起きつつ聞くそほととぎすこの あかとき 暁に來鳴く初声 (19・四一七一)
つねひと
 ② ……あしひきの 山 呼びとよむ さ 夜中に 鳴くほととぎす 初声を 聞けばなつかし…… (19・四一八〇)
 ③ ……うつせみは ものも 物思ひ繁し ゆゑ そこ故に 心 なぐさに ほととぎす ほととぎす 鳴く初声を 橘の 玉に合へ貫き……
 (19・四一八九)

右の三首の歌によれば、ホトトギスの「初声」は家持にとって、①は、期待される存在、②は心惹かれるもの、③は心を慰めるものであることが分かる。家持の歌の他に、ホトトギスの「初声」にはもう一例、作者不詳の「ほととぎす汝が初声は我にもが五月の玉に交へて貫かむ」(10・一九三九)があり、夏の雑歌に入っている。

漢詩には「初声」という用例はないが、春先にはじめて聞く鶯の鳴き声を「初轉」、鶏の朝一番の鳴き声を「初鳴」と表現する用例がある。

① 柳陌鶯初轉 柳陌鶯初めて轉り

梅梁燕始歸 梅梁燕始めて歸る

初唐・李嶠「二月奉教作」(『李嶠集』)

② 脰脰膊膊鶏初鳴 脰脰膊膊鶏初めて鳴きて

磊磊落落向曙星 磊磊落落曙星に向かう

魏晉・無名氏「古兩頭織織詩」(『藝文類聚』卷五十六)

漢詩のこの「初轉」「初鳴」の表現に影響されて、「ホトトギスの初声」を作り出したのではないかとも思われる。以上の考察によって、家持は漢詩文の表現を踏まえたり、取り入れたりして、歌作りに励んだことが明らかになったのではなからうか。

注

- (1) 『大伴家持大事典』 小野寛〔編著〕 二〇一〇年十一月 笠間書院
- (2) 『漢語大詞典』 漢語大詞典編輯委員會漢語大詞典編纂処編纂 二〇〇一年九月
- (3) 『漢詩の事典』 松浦友久編 一九九九年 大修館書店
- (4) 『日本うたことば表現辞典』 日本うたことば表現辞典刊行会 一九九八年一月 遊子館
- (5) 『ちんちんと千鳥のなく声は』 山口仲美著 一九八九年四月 大修館書店